

第25回原子力委員会臨時会議議事録（案）

1．日 時 2005年6月30日（木）10：30～10：45

2．場 所 中央合同庁舎第4号館7階 共用743会議室

3．出席者 近藤委員長、齋藤委員長代理、木元委員、町委員、前田委員
内閣府

戸谷参事官、後藤企画官、森本企画官、犬塚参事官補佐
文部科学省

研究開発局 坂田局長

4．議 題

（1）ITERのサイト決定のための6極閣僚級会合の結果について

5．配布資料

資料1 - 1 ITERのサイト決定のための第2回6極閣僚級会合結果概要

資料1 - 2 国際熱核融合実験炉（ITER）のサイト決定について〔文部
科学大臣談話〕

資料1 - 3 2005年6月28日のITER閣僚級会合におけるITER
交渉参加極の代表による共同宣言 仮訳

資料1 - 4 Joint Declaration by the Representatives of the Parties to
the ITER Negotiations, on the Occasion of the Ministerial
Meeting for ITER, Moscow, 28th June 2005

6．審議事項

（1）ITERのサイト決定のための6極閣僚級会合の結果について

標記の件について、坂田局長より資料1 - 1から1 - 4に基づいて説明が
あり、以下のとおり質疑応答があった。

（齋藤委員長代理）非常に大変な交渉を重ねて合意に至ったことについて労

を多としたい。ITER(国際熱核融合実験炉)建設に向けた合意であり、核融合研究者は夢の実現に一步前進したと受け止め喜んでいると思う。以前から気になっているのは、日本を「非ホスト国」とする表現だが、他の4極も「非ホスト国」なので、今後正式な協定を作るときに「準ホスト国」等、何かうまい用語に変えたほうがよいのではないかと思う。それから、これまで多額の費用を要するITERのために、基礎的なプラズマ研究等のその他の核融合研究が若干足踏みしていたところもあったが、今後、日本の核融合研究者は能力を高め、人材を養成し、約10年後に完成するITERでの実験では強力に日本が研究を引っ張ることができるよう努力をお願いしたいと思う。また、ITER計画にも今後国が中核となってそれなりの予算措置が必要であり、審議中の原子力長計において核融合以外に研究開発を進めるべきであるとの分野が多々指摘されているところ、ITERが非誘致になったということで原子力予算が削り込まれることの無いよう、しかるべき予算の確保を引続きお願いしたい。

(町委員) 日本に最終的に誘致できなかったのは残念だが、色々な要因があったと思われるし、「ホスト国」、「非ホスト国」のいずれもが勝者となれるよう是非努力していただきたいと思う。日本の存在感を技術面でもマネジメントの面でも出していただきたい。特に、「ホスト国」及び「非ホスト国」の役割など、日欧の共同文書に書かれている中身は非常に大事である。6極の共同宣言はこの「共同文書の内容に留意する」としているとのことだが、「合意」とは書かれていないので、今後ロシア、中国、韓国などに日本の貢献をよく理解してもらい、この共同文書の内容が円滑に推進されるようにすることが大事であると思う。その1つとして、ITER機構長を日本から出すのは非常に大事なことであり、それに加えて約20%に当たる研究者等が派遣できるという特権があるので、是非優れた人材を出していただきたい。それが日本の存在感と貢献を大きくし、日本の国益になると思う。

(坂田局長) 町委員が共同文書の実施が非常に重要とご指摘されたが、閣僚級会合でも、中山文部科学大臣がポトチュニクEU委員に対して「欧州はホスト国になるわけだから、共同文書にある欧州の役割を確実に果たすことは当然として、ITER本体についても、財政負担、プロジェクトマネジメント、インフラ整備等を確実に責任を持って実施していただきたい」旨を強調して申し上げた。それに対し、欧州の委員からは「欧州のコミットメントは完全に果たす」といった発言があった。そういった発言があったから安心できるわけではないが、今後とも日本だけでなく他の4極と協

力するなどして、欧州の責任を果たさせるよう継続して働きかけていく。

齋藤委員長代理のご指摘についてだが、まず、原子力予算はしっかり確保していきたいと思う。それから、日本はITER本体と幅広いアプローチを両面で行うという、相当大変な仕事をやることになる。ITER本体については、非ホスト国という立場だが、非ホスト国の中でも他国の倍の研究者を派遣することになるので、自ずとITER本体に対する貢献度は大きくなる。一方、幅広いアプローチはむしろ我が国が主体的に実施するものなので、こういった機会を日本の研究者、技術者は生かしていただきたい。そのために役所も十分支援する。また、「非ホスト国」という用語については、実態は確かに準ホストであるが、それをITER協定で具体的にどうするかは難しい問題である。他の非ホスト国との関係において、日本が非ホスト国であるにもかかわらず特別だと言え言いうほど、他の非ホスト国と問題が生じかねないという面がある。

(木元委員) 時間が無いので簡単に申し上げる。日欧をそれぞれ勝ち犬、負け犬というような発想でメディアに報道される場合があるが、そうではなく、名を捨て実を取るとの考え方もあり、世界に貢献する科学技術を開発するという目的に対して何も問題なく、これでよいと思う。そういう受け取り方で、それを国民にきちんと説明していく作業をまず始める。全てにおいてこれからが日本の実力を発揮する場だと思う。

(坂田局長) 長い大変な外交交渉だったので、交渉途中で事柄を明らかにすることもできず、説明責任を十分果たせたとはいえないかもしれないが、仕事の性格上やむをえなかったとご理解いただければと思う。ITERを是非誘致したいと多くの方にご期待いただいたにもかかわらず、それに答えられなかったことは残念に思っているが、色々な諸状況を考えれば、私自身は適切な判断だったと思っている。今後実行段階に移っていくが、日本が果たす重要な役割を、機会を捉えて国民にご説明することが大事だと思っている。

(前田委員) 時間が無いので一言だけ申し上げる。本当に長い間ご苦労様でした。色々な状況の中で、納得できる結果に持って行っていただいたと思う。これからまだやるべきことが多々あるようなので是非頑張ってくださいと思う。

(近藤委員長) 長い間ご苦労様でした。大臣の談話にもあるように様々な要件を総合的に判断してこの結論に至ったということを重く受けとめたい。この計画に参加する出発点での「核融合研究という人類が挑戦すべき課題に対して我が国が大きな役割を果たしたい」という思いはこれにより引続

き生かされる。原子力委員会としては、第三段階核融合研究開発基本計画の中の実験炉としてITERを位置づけてきたところであり、今回の合意をもってこの計画が推進されると評価する。委員各位が言われたように、我が国の関係者が幅広いアプローチの取扱いも含めてこれに欧州に勝るとも劣らぬ知恵と情熱を注ぎ込んで、寄与の点で名誉ある地位を占めつつ、各国と大きな成果を共有していくことが肝要。そうすることが、この交渉にあたって色々と希望や夢をいだいて側面から応援されてきた青森県を始めとする皆様の期待に答える道と思う。委員会としてはこの観点から適宜に発言していきたい。

(坂田局長) いただいたご意見をしっかり受け止めて、今後仕事を進めていきたいと思う。サイトは決まったが、これからも多くの仕事があるので、引続き色々な形でご指導ご支援をいただければと思う。